

# 「患者治す」心臓外科発展に尽力



国立循環器病研究センター名誉総長  
文化勲章 川島康生氏

日本の心臓外科の発展を牽引し、心臓移植医療の確立に貢献したとして令和7年度の文化勲章に、国立循環器病研究センター名誉総長、大阪名誉教授の川島康生氏(95)が選ばれた。心臓手術の安全性や精度向上に加え、後進育成にも尽力し、70人以上の指導者を輩出。心臓病の子供を救うための「あけみちゃん基金」(産経新聞社提唱)の運営にも長年携わってきた。一人でも多くの患者を治す、命を救う。熱い志を持ち続けた功績が評価された。

(堀口明里)

初めから医者を目指して だが、工学部の勉強は合っていたわけではない。数学と ないと感じるようになり中物理が好きだったことから 退、大阪大医学部へ進んだ。ら、京都大工学部に入學。 父親が産婦人科医だった

こともあり、医療は身近な世界。実習で病院の現場を目にするようになってからは、医者になる決意が固まった。

術法や臓器の長期保存法の開発、人工心肺装置の安全性向上…。次々と研究成果を発表し、心臓手術の精度を高めた。米国留学を経て、帰国後は国内での心臓移植実現に向けた活動にも力を入るよう。日本では法律面や倫理面で課題が多くなり、心臓移植は停滞が続いていた。

「自分の手で直接患者を治したい」。こう思い、外科医を目指すように。心臓外科に進んだのは、人体の中で最も機械的に動く心臓そのものに興味があったからだ。「1番ダイナミックな臓器。機械工学のようで楽しかった」と研究に打ち込んだ。

術の一つとして行えるよう力に「患者さんを、何とかして治してあげたい。この気持ちに尽きる」と強調。「決して優しくはなかったのに、たくさん弟子が育ってくれました」と話し、身の思いを後世に残すため、現在は本の執筆にも時間を費やしているという。

「あけみちゃん基金」をめぐって、帰国後は国内での心臓移植実現に向けた活動にも力を入るよう。日本では法律面や倫理面で課題が多くなり、心臓移植は停滞が続いていた。

心臓移植を実現させる熱意と責任感は並々ならぬものがある。自身の著書「心臓移植を目指して」では、多岐にわたる活動の原動力を感じてきた。ロボットが導入されても、人の手なしでは医療は発展しない。こう力を込めた。

## 「あけみちゃん基金」運営 長年支え

先天性心疾患に対する手

「あけみちゃん基金」運営 長年支え